柊（ひいらぎ）の館

陳舜臣

講談社文庫

柊の館（ひいらぎやかた）
陳舜臣（ちんしゅんしん）

昭和57年1月15日第1刷発行

発行者　三木 章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京（03）945-1111（大代表）
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　有限会社中沢製本所

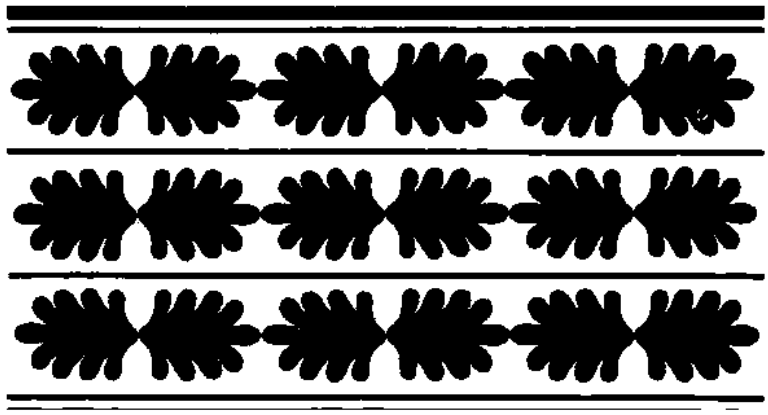
© Chin Shun Shin 1982

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

柊の館

陳舜臣



講談社

目次

第一話　青い充実のとき　一三
第二話　夜の影　五六
第三話　サキ・アパート　八九
第四話　六人の客　一三九
第五話　わがレンアイ　一五七
第六話　ゴールデン・エイジ　一八九
第七話　岸壁の話　二〇七
解説　権田萬治　二五七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

柊の館

（ひいらぎのやかた）

からだのすみずみまで、精神の躍動がつたわって、ほんとうに生きているのだ、と叫びたくなるような場面。――人生にはそんなときがなんどかあるものだ。

若いころは、これからもこんな経験はたびたびくり返されるだろうと、それほど大切におもわない。

「若い人のぜいたくのなかで、これが一ばん腹の立つぜいたくです」

と、杉浦富子はよく言った。

自分の過去をふりかえってみると、そんな場面は、ほんとうにかぞえるほどしかなかった。意外にすくないものなのだ。――富子は若い人たちにむかって、そのことをとくに強調したものである。

「じゃ、杉浦さんは何回ありましたの、そんなときが？」

と、メイドの鎌田初子がきいた。

ここは、神戸の北野町にある、通称『とんがり屋敷』のなかである。それはセブン・シーズ・ラインというイギリス系船会社の宿舎なのだ。三百坪ばかりの敷地に三棟の建物があり、一ばん大きいのが北欧ふうに屋根の勾配（こうばい）が急なところから、『とんがり屋敷』の異名を取ったのであろ

う。そこには、代々の神戸支店副支配人（サブ・マネージャー）の家族が住む。（支配人の社宅は別に芦屋にあった）もう一棟の古ぼけた洋館は、独身の英人社員のための宿舎で、通称は『ごみとり部屋』である。これは寄宿舎を意味する英語のドーミトリーが訛ったものとおもわれる。

『とんがり』と『ごみとり』がならんでいるうしろに、細長い平屋の日本家屋がある。メイド・ルームと台所を兼ねていて、『とんがり』のほうとは、渡り廊下でつながっている。

台所の隣の控えの畳の部屋で、コックの杉浦富子が二人のメイドとむかいあっていた。

初子はメイドになって、まだ一週間もたっていない。

そばで、おなじメイドの大原圭子が、横をむいて口をすぼめた。

（初ちゃん、あんまりなれなれしすぎるわ。コックさんって、どんなにえらいものか、あんたまだ知らないのね）

あとでそんなふうに、初子に注意してやらねばならない。圭子は内心そうおもった。

日本語でいえば、おなじ『女中』であるが、このとんがり屋敷では、コック、アシスタント・コック、メイドと三段階に分けていた。コックといっても、台所の仕事をするだけではなく、実質的には『女中頭（がしら）』に相当する。この屋敷には、いつも四、五人の日本人女性が使われていたが、その給料はぜんぶコックに渡される。そして、コックがメイドたちの働きぶりをみて、給料をきめるのが原則なのだ。女中部屋の独裁者といってよい。

四十六年のキャリアをもつそのコックにむかって、一週間足らずのヒヨコの初子が、まるで対等の口をきいている。

だが、杉浦富子は眼を細めて、にっこりと笑った。
「さあ、何回になるでしょうか？　……勘定したことはないわ」
「でも、かぞえるほどしかないって、さっきおっしゃったでしょ」
と、初子は揚げ足をとった。
「あら、そうでしたわね。ほ、ほ、ほ……」
「じゃ、べつにかぞえなくてもいいから、そのなかの一つ二つ、内容をきかせてくださらない？　経験者は語るなんて、週刊誌ではよく読むけど、じかに話を聞くのはめったにないものね」
「あたしに思い出話をしろというの？」
「ええ、まあ、そうですわ」
「おやおや、あたしも年を取ったわね」
「だって、もう六十を越したでしょ？」
と、初子は遠慮なく訊いた。
「初ちゃん！」
と、圭子がたまりかねて、初子の肱をついた。
「なあに？」
初子は先輩メイドの圭子が、なにかサインを送って寄越したとは察したが、その意味がとっさにはつかめなかったようだ。圭子が答えかねて口ごもっているあいだに、さすがの初子も、やっと思いあたった。――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ああ、そう、レディーに年をきいちゃいけなかったのね。だって、ほ、ほ……」
初子の笑いのなかには、
（杉浦さんが、いまさら年を気にすることはないでしょう。それにレディーだなんて。……）
というニュアンスがこめられていた。
「あたしのかわりに、年をかぞえてちょうだい」と、富子は笑いながら言った。――「かんたんな算術よ。ここに勤めて四十六年。はじめて来たのが十七のとき」
「じゃ、六十三だわ」
初子はすかさず答えた。
「ほんとに、思い出話をする年になってしまったわ。……でも、年寄りの話なんて、ちっとも面白くないでしょ」
富子は、頬にうかべた微笑を消さずに、やさしい声でそう言った。
「そんなこと、ありませんわ」
圭子は思わず口をはさんだ。
圭子はとんがり屋敷に勤めて、ことしで三年になる。そのあいだ、コック杉浦富子の思い出話など、ただの一度もきいたことがない。好奇心がうごいて、無意識のうちに声が出たのである。
「ほ、ほ、きょうは年寄りの日でもないのに」
と、富子はめずらしく冗談を言った。
機嫌が良いのである。

「杉浦さんの十七のときのお話を、ぜひききたいわ。ねえ、大原さんもそうおもわない？」
と、初子は圭子に同意をもとめた。
「ええ」
と、圭子はうなずいた。
「十七のときねえ。……」杉浦富子は眼をとじて、「さっき言った、忘れられない、大切な場面の一つは、このとんがり屋敷ができたときのことでしょうね。それがあたしの十七のときでした」
「あら、そう。……このあいだ屋根の修繕に来た職人さんが、煙突の根もとに、一九二五と彫ってあるのをみたそうよ」
と、初子は言った。
「そう、一九二五年、大正十四年です。昨日のことのようにおぼえてるわ。……いえ、近ごろは、昨日のことでさえ、うまく思い出せませんよね。四十六年も前のことですけど、そのときのマネージャーが、『トミ！』と大声で呼んだ、そのだみ声が、まだ耳のあたりにのこってるような気がします。……そう、マネージャーはカーペンターって人でした。リンカーンみたいなひげをはやした……」
富子がそんなふうに語りだした物語は、これに題をつけるなら、『青い充実のとき』とでもすればよいだろう。

第一話　青い充実のとき

1

セブンティーン。――いまの言葉では、かっこいい、というんでしょうね。むかしの十七といえば、活潑というよりは、おぼこいというかんじが先に立ったものです。あたしが神戸に来たのは、その十七のとき、長崎より大きな町を知らないので、見るもの聞くものみんな珍しく、眼をまるくしどおしでした。

あたしの故郷（くに）は五島ですけれど、母親が平戸へ働きに出ていましたので、あたしは平戸育ちなんです。

そうそう、このへんの外人の家のメイドさんには、五島の人が多いようですね。五島の女は働き者だそうですが、べつにそれとは関係ありませんわ。外人の家で新しく女中がほしいとき、近所の家のメイドさんに頼んだものです。たまたま五島の女の人が、ロイド商会やアームストロング商会の宿舎に、早くから勤めていたので、その人たちが頼まれると、自分の故郷から呼び寄せ、しぜん同郷のメイドが多くなっただけでしょう。

四十六年前の話をするときに、外人という言葉は、どうもちぐはぐなかんじですね。あのころは、異人さんといいましたよ。

異人屋敷へ奉公するなんて、十七のあたしは、鬼ケ島へでも流されるみたいにこわがってました。

――せっかく、たみさんが口をきいてくれたんだから、しっかり働きなさいよ。

と、母さんはあたしを励してくれたっけ。

あたしを紹介してくれたのは、そのころここでコックをしていた和田たみさんでした。

ええ、いまとおんなじですわ。コックの下にアシスタント・コック、これは塚本弘子という人でした。途中の人の名前はときどき忘れていますが、最初のメンバーはよく憶えているものですね。メイドは田口清子と石野良江という人。あたしは石野さんの後任で来たんですけど、なにかの都合で一と月ほど辞めるのがのびましてね。で、しばらく一しょに働いていたのですよ。

給料ですか？　その一と月は、二人で一人の給料を半分に分けたと記憶しています。そんなことは、コックの和田さんの鶴の一と声で、ちゃんときまったものです。誰一人反対する者はいませんでした。

いいえ、あてこすりなんかじゃありませんよ。あなた方も、あたしの言うことを、よくきいてくれましたからね。……ただ一人前働いたのに、給料が半分だなんて、近ごろの人なら承知しませんわ。ですから、こちらもそんなことは要求できません。なにもかも、時代のちがいですよ。……

あたしがこちらへ来た当座は、とんがり屋敷はまだ建築中で、大工さんがはいっていました。そうです、ごみとり部屋と女中部屋だけだったのです。

いまとおなじように、支配人の宿舎は芦屋にあって、ごみとり部屋には、本国から赴任してきた独身のイギリス人社員が何人か住んでいました。はじめは、副支配人という職はなかったのです。関東大震災のせいでしょうか、そのころ会社も横浜より神戸のほうが忙しくなって、副支配人を置くようになったのです。これはかなりのキャリアのある、ちゃんとした家族持ちですから、ごみとり部屋に抛り込んでおくわけにはいきません。ですから、新しくその住居を用意することになって、このとんがり屋敷ができたというわけです。そう、家が出来あがるまで、香港から赴任してきたジョン・フォスターという副支配人の家族は、ごみとり部屋の一室で辛抱していました。

あたしは、鬼ケ島のつもりで来たのですが、来てみると極楽のような気もしましたわ。だって、あのころ、あたしなんか五島でも平戸でも、いつも大ぜいの人が狭い部屋にざこ寝していたんですからねえ。

ここへ来て、四畳半ですけれど、一人が一部屋もらえたので、それだけはうれしくてたまりませんでした。そう、プライバシーが守れたのですよ。畳の部屋ですけれど、誰もが出入りできる襖じゃなくて、ちゃんと鍵のかかるドアがついていたんですからね。

たしか二日目の夜だったとおぼえていますが、あたしは部屋に鍵をかけると、むしょうにうれしくなって、そのへんを跳ねまわったものです。やっぱり十七歳なんて、半分は子供ですよね。

隣の部屋……そう、いまの圭ちゃんの部屋にいた田口清子さんが、境の壁をどんどん叩いて、

――これ、しずかにしなさいよ！

と、叱りましたっけ。

あんなによろこんだのは、それまでの生活がいかにもひどく、プライバシーなんて、そのかけらもなかったからでしょうね。

ああ、もう一人忘れてましたわ。副支配人のフォスターさんが、香港から連れてきた阿媽（アマ）さんです。

あなた方も、ときどき阿媽（アマ）さんって呼ばれたことがあるでしょ？　あれはね、明治のころに日本に来た異人さんは、香港や上海に住んでいた人が多かったからですよ。あちらではメイドのことを阿媽（アマ）って呼ぶので、日本に来てからも、慣れた呼び方を変えなかったのですね。

で、その阿媽（アマ）さんは劉（りゅう）という人でした。名前は珠芳――ジーフォンで、フォスターさんの坊やの子守りだったのです。

この人は、フォスターさん個人の使用人でしたから、会社とは関係ありません。ですから、女中部屋の和田コックの命令も、むこうには届きません。それで、和田さんはよく怒ってましたわ。

珠芳（ジーフォン）さんは口数のすくない人でした。……いえ、日本語がわからないからだけじゃありません。もともと黙りがちな人でしたけれどなんとなく……そうですね、黙って人をよく観察していたようです。なにげなくですよ。でも、ときどきキラと眼を光らせましたね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com